

# 不幸中の幸い —あと10秒遅ければ—

北村 豊



年で創立90年を迎えた歴史ある新生病院に、私が20年以上も前に勤務していた時のことである。

“ドスン”という振動を伴う音は、突然に手術室にも伝わって、窓のない医療現場は一瞬にしてただの暗室と化してしまった。

その数秒後の暗闇から聞こえてきたのは、看護師さんの「あれ！どうしたの？」という早口で緊張に満ちた第一声であった。

その落雷事故は、信州の小布施町にある昨

全身麻酔下での手術を計画し、正に術野の切開をしようとする直前にその停電事故は、起こったのであった。起動するはずの病院の自家用発電装置がなぜ発動しないのか？と不思議に思いながらも、麻酔医と相談の上、その日の手術は中止とした。

し、短時間ではあったが全身麻酔中の意識が欠落し、自分で術野直上になるはずであった頬”を手で押さえても、症状が無いのを不思議そうにされたため、麻酔中の落雷で突然の停電が起こり、復電の予測が立たなかつたため、切開直前までいていた手術を中止したことを伝えたところ、安堵の表情をされたことにほっとしたものである。

20cm位もある地面が樹枝状の形で隆起して走っている珍しい現象が見られた。調べてみると、落雷（直撃雷）を受けた場所より周囲に極めて強力な電流が放電されることによって描かれる木の枝のような図形があり、これを最初に発見したドイツの物理学者の名前にちなんで“リヒテンベルグ図形”と呼ばれていることが判った。

その時の落雷は直撃雷にかなり近い誘導雷であったらしく、中部電力の技師の人によれば、あまりにも強力な電流では、自家発電装置も作動しなくなってしまうそうである。病院にとつての停電がどれほど恐いものかを私は思い知らされたが、現在では多くの病院が以前から備えられている自家発電装置に加えて太陽光発電やバッテリーなども準備され、フェールセーフの方向へとシフトしていつていると聞き及ぶ。

（上高井郡小布施町信州口腔外科インプラントセンター 所長）